

なぜ今「実在論」なのか？

——マルクス・ガブリエルの「新実在論」を例として——

中島 新（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

本報告では、マルクス・ガブリエルの「新実在論」を手がかりとして、ポストモダン以降の実在論の展開について検討したい。

一般に「実在論 Realism, Realismus」は、何らかの事物の実在を認める立場を指しており、また実在論のなかでも、いかなる事物の実在を主張するかによって立場が異なるとされる。それに対し「唯名論」、「相對主義」、「觀念論」などは実在論に対立する「反実在論」的傾向を持つとされ、両立場による論争は哲学史においても主要テーマのひとつと言える。そして現在、ポストモダン以降の思想展開として再び「実在論」に注目が集められている。

いわゆるポストモダンの時代においては、事物に自立的実在性を認めない「反実在論」的主張、とりわけ「相對主義」や「構成主義」の立場が優勢であった。しかしこれに対する批判として現在様々な実在論的主張が現れ始めている。例えば「思弁的実在論」（思弁的唯物論）のグループに属するカンタン・メイヤサーは、カント哲学以降長らく困難とされた「物自体」への思考可能性の復活を試みる。思弁的実在論は「事物それ自体」や「世界それ自体」を主題化する傾向を持ち、メイヤサーは特に思考と世界との相関を強調する「相関主義」を批判することで、数学的・自然科学的傾向を帯びた実在論を展開する。またこのグループとは別に、ロイ・バスカーやそれに続くバース・ダナーマークらの「批判的実在論」や、本報告で取り上げるマルクス・ガブリエルやマウリツィオ・フェラーリスの「新実在論」なども現在の実在論に位置づけられる。

こうした状況を踏まえ、本分科会のテーマである「実在論の現在」について語るならば、そもそも「実在論とは何か」という大きな問いに突き当たる。便宜上、先の立場を「実在論」としてまとめたが、それぞれが独自の方向性を持っている。果たしてどの立場がより「実在論」的な立場なのか？この問いそのものの解決は困難だとしても、それぞれの立場が「実在論」を標榜する理由をいくつかの論点から検討することはできる。

まずは、それぞれの立場が現在の「自然科学」をどのように受容・批判しているのが論点となりうる。例えばメイヤサーが数学や自然科学に親和的な立場であるのに対し、ガブリエルは行き過ぎた「科学主義」の立場に対して警鐘を鳴らす。この際に彼らが念頭に置く科学像や科学理解の相違点を検討することで、彼らの実在論の特徴が明らかになる。

また、「実在論」の批判対象とされる「ポストモダン」自体の評価も論点となりうる。そもそも「ポストモダン」という名称そのものが多様な内容を含んでいるため、もし現在の実在論が「ポストモダンに対する批判」として形成されているならば、いかなる主張内容や立場に批判的であるのかを厳密に区別する必要がある。それはまさに「ポ

ストモダン」の時代を乗り越える主張が「実在論」によって可能であるのか、可能であるならば果たしてどのような主張になるのかを明らかにする試みとなる。

本報告はこれら論点について、とりわけマルクス・ガブリエルの「新実在論」という立場から検討していく。ガブリエルの立場は通常「新実在論」のグループへ分類されるが、彼自身はこの名称を「ポストモダン以降の時代を特徴付けるもの」とするに留めており、自身固有の立場を「中立的実在論」、「存在論的実在論」、「意味領野存在論」など、様々に表現する。しかし彼の「実在論」的立場は、「世界は存在しない」という主張から出発する。この主張だけを見れば彼の立場は「実在論」とかけ離れているように思えるが、彼は同時に「世界以外はすべて存在する」と主張する。つまりガブリエルの実在論は「世界の非存在」と「それ以外の存在」という二つの主張から成り立つ。ここで「世界」のみが存在から除外される点に彼の実在論の特徴があるわけだが、重要なのはその理由がドイツ観念論のとりわけシェリング解釈に由来するということである。

ガブリエルはいわゆる「ドイツ観念論」研究に従事し、シェリングの「神話の哲学」研究を専門としている。通常「観念論」と「実在論」は対立概念として捉えられるが、むしろガブリエルは「ドイツ観念論」そのものの（「観念論」という呼称の問題を含めた）再解釈から自身の立場を形成している。これは先の「実在論とは何か」という論点について「観念論」との関係から考察し、さらには現在の科学主義に通用する批判的な視点をドイツ観念論から掘り出す試みだと言える。またガブリエルはポストモダンの思想が抱える問題の萌芽をカントに見ており、その意味でも、カントに対する応答として形成された「ドイツ観念論」の再解釈からポストモダンに対するアプローチを導き出そうとしている。

本報告ではこうしたガブリエルの主張を整理しつつ、その主張が現在の実在論的動向のなかでどのように位置づけられるのかを検討したい。